

脱使役化動詞の統語的特徴 —受動・使役・可能の観点から—

竹本 理美（筑波大学大学院生）[†]

1. はじめに

日本語の自動詞には、非能格動詞と非対格動詞の二種類が存在することが知られている。さらに、影山（1996）では、非対格動詞の中でも以下のような異なるタイプに分かれることを指摘している。

- (1) 反使役化動詞：接辞-e-によって使役主を変化対象と同定することで自動詞化が行われる。（壊れる、外れる、折れる、崩れる等）
- (2) 脱使役化動詞：接辞-ar-によって使役主を意味構造で抑制し統語構造に投射しないことで自動詞化が行われる。（集まる、植わる、掛かる、詰まる等）

この両者に関しては、次に示すように「勝手に」等の副詞との共起や命令形の可否について違いが見られる¹。

- (3) a. 取っ手が勝手に外れた。（反使役化動詞） （影山 1996 : 189）
b. *勝手に庭に木が植わった。（脱使役化動詞） （影山 1996 : 189）
- (4) a. 取っ手よ、外れないでくれ！
b. *木よ、植われ！ （影山 1996 : 189）

しかし、上記のような非対格動詞における下位分類が、他の構文においてもその対立が見られるかという点については十分に論じられていない。

したがって、本発表では、上記の副詞との共起や命令形の可否以外にも反使役化動詞と脱使役化動詞の対立が見られる現象を指摘する。さらに、その対立が生じる理由について、特に脱使役化動詞の構造的特徴に着目して説明を与えることを目的とする。

2. 現象

2.1 間接受身文

まず、間接受身文における非対格動詞のふるまいに着目する。影山（1993, 1996）では、間接受身文を非能格動詞と非対格動詞で対立が見られる現象として捉えている。

- (5) a. 隣の住人に夜おそくまで騒がれて困った。

[†] takemoto5108@gmail.com

¹ 影山（1996）の分析に対しては問題点も指摘されている（Matsumoto 2000 等）。本発表では、そのような問題点が存在することも認めつつも、非対格動詞の分類には有用性があるという立場をとる。

- b. *?秋になると、枯葉に散られて、もの悲しい。 (影山 1996 : 31, 下線筆者)

しかし、実際には非対格動詞であっても間接受身文として容認される場合があり、さらに動詞によって容認性に差が生じていることが観察される。

- (6) a. 女優に倒れられて、映画の撮影ができなくなった。
b. (?)論文執筆中に突然パソコンに壊れられて、とても困った。
c. *お札をくずしてばかりいたので小銭に集まられて、財布が重くなった。

「倒れる」「壊れる」「集まる」はそれぞれ非対格動詞であるが、(6a)のように二格名詞が有生名詞である場合には適格な文となり、さらに無生名詞であっても(6b)のように容認されやすい場合も存在する。一方で、(6b)と同じ無生名詞でも(6c)のように容認されない例もある²。本発表で着目するのは、二格名詞が無生名詞でありながらも(6b, c)のように容認される例と容認されない例が存在する点である。

本発表では、この容認性の違いは、反使役化動詞と脱使役化動詞の対立に対応していることを指摘する。具体的には、(7)に示すように反使役化動詞の場合には容認されやすくなる一方で、(8)に示すように脱使役化動詞の場合には容認性が著しく低くなる。

- (7) a. (?)論文執筆中に突然パソコンに壊れられて、とても困った。(再掲)
b. 走行中に右のタイヤに外れられて、事故を起こすところだった。
c. 台風の日に傘に折れられて、ずぶ濡れになってしまった。
(8) a. *お札をくずしてばかりいたので小銭に集まられて、財布が重くなった。(再掲)
b. *いつの間にか校庭の隅に苗木に植わられて、処分に困った。
c. *トイレの壁に貴重な絵に掛かれて、その価値が台無しになってしまった。

以上のように、間接受身文では反使役化動詞・脱使役化動詞の対立が見られると言える。以下では、使役文や自動詞による可能表現に関しても同様の対立が存在することを提示する。

2.2 使役文

Shibatani (1976) 等で指摘されているように、無生名詞を被使役者とした使役文は容認性が低いものの、(9b) (10b) のように、反使役化動詞の場合には原因主語にすることで容認性が高くなることが観察される。

- (9) a. ??太郎が研究室のパソコンを壊れさせた。
b. 落雷による急な停電が、研究室のパソコンを壊れさせた。
(10) a. ??作業員が右側のタイヤを外れさせた。

² 間接受身文において非対格動詞が容認される場合があること、また非対格動詞内で容認性に違いが見られることは、Washio (1989-90) や高見・久野 (2001) 等でも指摘されている。

- b. 部品のゆるみが，右側のタイヤを外れさせた。
- (11) a. ??報道記者が傘を折れさせた。
- b. 台風による強風が，傘を折れさせた。

一方で，脱使役化動詞の場合には主語の意味役割にかかわらず容認性は低いままである。

- (12) a. *太郎が小銭を集ませた。
- b. *お札ばかり使っていたことが，いつの間にか小銭を集ませた。
- (13) a. *生徒たちが校庭に木を植わらせた。
- b. *緑化運動の高まりが，各地の学校の校庭に木を植わらせた。
- (14) a. *夫がトイレの壁に貴重な絵を掛からせた。
- b. *絵に対する造詣の無さが，トイレの壁に貴重な絵を掛からせた。

ここから，使役文においても反使役化動詞・脱使役化動詞の対立が見られると言える。

2.3 自動詞による可能表現

「(ラ)レル」等の可能形式を伴わずに自動詞の無標形式で可能の意味を表すかにおいても，並行的な対立が見られる。不可能を表す陳述副詞「とうてい／とても～ない」との共起の可否(大崎 2005)から分かるように，(15)では反使役化動詞は可能の意味が表されない一方で，(16)では脱使役化動詞は可能の意味を表している。

- (15) a. *最近のパソコンは {とうてい／とても} 壊れない。
- b. *A社のタイヤは {とうてい／とても} 外れない。
- c. *高級な傘は {とうてい／とても} 折れない。
- (16) a. 貴重な小銭は {とうてい／とても} 集まらない。
- b. 校庭にバオバブの樹は {とうてい／とても} 植わらない。
- c. ツルツルした壁に絵は {とうてい／とても} 掛からない。

以上の観察からは，間接受身文・使役文・自動詞による可能表現において反使役化動詞・脱使役化動詞の対立が生じていることが明らかとなった。すなわち，影山(1996)で提示されている非対格動詞の分類は，副詞との共起や命令形の可否だけでなく，上記の現象においても違いが見られるという点で有用であると言える。

それでは，なぜ反使役化動詞と脱使役化動詞は同じ非対格動詞でありながら，ここまでに挙げた現象において対立が見られるのか。以下では，特に脱使役化動詞のふるまいに関して，その形態統語的特徴から説明を試みる。

3. 分析

脱使役化動詞の形態統語的特徴を捉えるうえで重要になるのは，接辞-ar-の機能である。1

節の(2)でも示したように、影山(1996)では、接辞-arが意味構造上で使役主を抑制する機能があることを論じていることから、2節で示した現象間での脱使役化動詞のふるまいを説明するためには、接辞-arの形態統語的特徴に着目する必要がある。影山(1996)では語彙概念構造を用いた分析を展開しているが、本発表では統語的側面からの分析を進めるため、接辞-arの機能に関して分散形態論(Distributed Morphology)の立場から捉えた先行研究である高橋(2015)、新沼・木戸(2016)の分析を援用しながら、説明を行う。

3.1 -ar-動詞に対する形態統語的分析

高橋(2015)では、(17)に示すように、-ar-動詞は外的要因を外項とする他動詞の構造を備えた動詞であり、-ar-が非頭在的な統語的実体(Event Argument)を導入すると分析している。

(17) [vP e [vP 募金 [$\sqrt{\text{atsum}}$] v] ar] (e = implicit causing event) (高橋 2015 : 42)

また、新沼・木戸(2016)は-ar-を Middle Voice Phrase の主要部とし、動作主等の意味役割を持つ非頭在的な NP が Middle VoiceP の指定部に生成するとして、次のような構造を提示している。

(18) [Middle VoiceP (NP) [Middle Voice' [vP 募金 [v' [$\sqrt{\text{atsum-}}$] v]]] -ar-]
(新沼・木戸 2016 : 269 ブラケット表示に改変)

ここから、高橋(2015)、新沼・木戸(2016)の両者とも、-ar-が非頭在的な項を導入すると分析している。以下では、このような-ar-の形態統語的特徴に基づき、2節で提示した間接受身文・使役文・自動詞による可能表現における脱使役化動詞のふるまいに対して説明を与える。

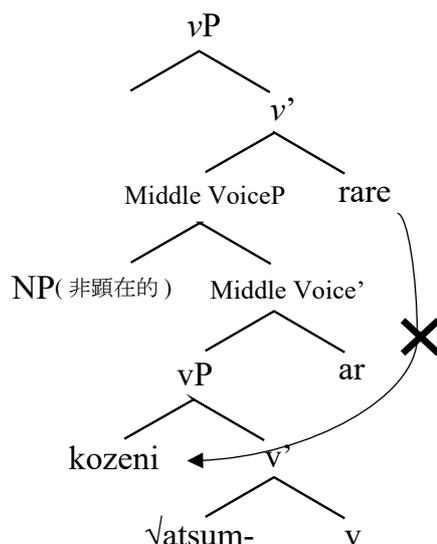
3.2 各現象に対する分析

3.2.1 間接受身文

受身文に対しては、統語的側面から多くの論考がなされているが(Kuroda 1965, Kuno 1973 等)、間接受身文については補文構造を持ち、二格名詞が補文主語位置に項として生起するという分析で共通している(Hoshi 1999)。さらに、Fukuda(2006)や長谷川(2007)では間接受身文における二格は主節動詞(r)are から構造格として補文主語に付与されると分析している。以上から、脱使役化動詞では-ar-が非頭在的な項を導入するため、(20)のように主節動詞(r)are と格が付与されるべき補文主語の内項との間に非頭在的な項が介在する構造となる。

(19) *小銭に集まられた。

(20)



すなわち、-ar-によって導入された非頭在的な項が、主節動詞による格付与操作を阻害するために脱使役化動詞では間接受身文が成立しないと考えられる。

3.2.2 使役文

使役文に関しても、基本的には間接受身文と同様の分析が適用されると考える。つまり、Kuroda (1965) から指摘されているように、使役文も補文構造を持ち、被使役者となる補文主語位置の項に対して主節動詞(s)ase が格付与を行う。したがって、脱使役化動詞の場合には、主節動詞と格付与される補文主語の内項との間に非頭在的な項が介在するため、格付与操作が行えず、使役文が成立しないと言える。

3.2.3 自動詞による可能表現

自動詞による可能表現に関して、青木 (1997) や大崎 (2005) では意味的に動作主が含意されることが可能の意味を表すことと関連すると指摘している。まさしく、構造的には非頭在的な項が導入されることが動作主の含意を意味し、その結果可能の意味が生じると言える³。

3.3 まとめ

以上まででは、脱使役化動詞に相当する-ar-動詞の形態統語的特徴から、間接受身文・使役文・自動詞による可能表現における脱使役化動詞のふるまいが説明されることを示した。

本発表では触れられていないが、説明すべき事項として反使役化動詞のふるまいも挙げられる。基本的な分析の方向性としては、反使役化動詞は非頭在的な項が導入されないために間接受身文や使役文において格付与操作が可能となり、また非頭在的な項を導入しないため

³ 関連する現象として、以下に示すような「可能動詞+テイル」において可能接辞が脱使役化のプロセスを持つ自動詞化接辞として機能する現象が存在する (竹沢 2015)。

(i) この論文はよく書けている。(竹沢 2015 : 267)

竹沢 (2015) では、(i) は可能接辞-e-によって基体動詞の外項が抑制されるという脱使役化のプロセスを経て、非対格構造として派生されると分析している。

に意味的に動作主も含意されず、可能の意味が生じないと考えられる。しかし、具体的な理論的検証には至っていないため、今後の課題としたい。

4. おわりに

本発表では、以下の二点について論じた。

- (21) a. 反使役化動詞と脱使役化動詞の対立が、間接受身文や使役文、自動詞による可能表現で見られることを示した。
- b. 接辞-ar-が非頭在的な項を導入するという形態統語的特徴から、(21a)で挙げた各現象における脱使役化動詞のふるまいに対して説明を行った。

ここから、非対格動詞における反使役化動詞と脱使役化動詞という分類に基づくことで、取り上げた各現象での非対格動詞間のふるまいの違いに対して説明が与えられることを示した。

参考文献

- 青木ひろみ (1997) 「《可能》における自動詞の形態的分類と特徴」『言語科学研究』3, pp.11-26. 神田外語大学.
- 大崎志保 (2005) 「日本語の自動詞による可能表現」『日本語文法』5-1, pp.196-211.
- 影山太郎 (1993) 『文法と語形成』ひつじ書房.
- 影山太郎 (1996) 『動詞意味論』くろしお出版.
- 高橋英也 (2015) 「日本語の使役起動交替に対する形態統語的アプローチ」『リベラル・アーツ』9, pp.35-47. 岩手県立大学.
- 高見健一・久野暉 (2001) 『日英語の自動詞構文』研究社.
- 竹沢幸一 (2015) 「2種類の「可能動詞+テイル」構文」深田智・西田光一・田村敏広 (編)『言語研究の視座』pp.266-279. 開拓社.
- 新沼史和・木戸康人 (2016) 「コーパスを利用した日本語の ar 自動詞の形態統語論的分析」小川芳樹・長野明子・菊地朗 (編)『コーパスからわかる言語変化・変異と言語理論』pp.266-282. 開拓社.
- 長谷川信子 (2007) 「日本語の受動文と little v の素性」*Scientific approaches to language* 6, pp.13-38.
- Fukuda, Shin (2006) Japanese passives, external arguments, and structural case, *San Diego Linguistic Papers* 2, pp.86-133.
- Hoshi, Hiroto (1999) Passives, (ed.) Natsuko Tsujimura, *The handbook of Japanese linguistics*, 191-235.
- Kuno, S. (1973) *Structure of the Japanese Language*, MIT Press: Cambridge.
- Kuroda, S.Y. (1965) *Generative Grammatical Studies in the Japanese Language*, Doctoral dissertation, MIT.
- Matsumoto, Yo (2000) Causative Alternation in English and Japanese: A Closer Look, *English Linguistics* 17-1, pp.160-192.
- Shibatani, Masayoshi (1976) Causativization. *Japanese Generative Grammar*. pp.239-294.
- Washio, Ryuichi (1989-90) The Japanese Passive, *The Linguistic Review* 6, pp.227-263.